

福島県岩瀬牧場の近代化産業遺産としての再評価

Revaluation as Heritage of Industrial Modernization in Iwase Farm, Fukushima Prefecture

大島 卓* 鈴木 雅和** 濱 定史***

Makoto OSHIMA Masakazu SUZUKI Sadashi HAMA

Abstract: The purpose of this study is to reveal the historical background of Iwase Farm as Japan's first Western ranch across Kagamiishi and Sukagawa city, Fukushima Prefecture. And re-evaluate the value of a complex modern industrial heritage of Iwase Farm. Classified into seven times since opening the ranch up Iwase, said the fact the course. And organized into four categories of heritage resources in the modernization of farms and industry. Iwase Farm, as well as the value of the tangible heritage of modern industry, pastoral industry in the Meiji era technology was introduced directly from overseas to bring the landscape "Westernization" as an example of the value of the combined worth of the intangible to have. Go through the time in more than 130 years been established as the prototype of the Western livestock industry in Japan, came to have a landscape value as a pasture landscape. Japan said that the origin of the pasture landscape planning principles established at the time.

Keywords: *modern industrial heritage, pasture landscape, Fukushima, westernization*

キーワード：近代化産業遺産，牧場景観，福島，西洋化

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

産業遺産は、主として幕末から昭和初期にかけて、各地域における産業近代化の過程を物語る存在として貴重である。古さや希少さに由来する価値に加えて、国や地域の発展において果たして来た役割、産業近代化に関わった先人達の努力等、豊かな無形の価値を有する。今日、東北地方において産業遺産として認定されているものは決して多くない。文化庁認定の「重要文化財（建造物）：平成23年度」では2,374件中158件（6.7%）、重要文化財のうち「近代（産業、交通、土木）：平成23年度」でも66件中5件（7.6%）に留まり、経済産業省認定の「近代化産業遺産：平成20年度」では540件中66件（12.2%）である。明治初期の産業奨励を背景とした東北巡幸が2回行われている経緯を踏まえると、多くの遺産が歴史的な価値を有しているにもかかわらず未だ正当な評価を得ていないと思われる。本研究では、福島県須賀川市と鏡石町にまたがる日本初の西欧式官営牧場を前身とする岩瀬牧場の歴史的な経緯を明らかにし、地域における近代化産業遺産として岩瀬牧場の複合的な価値を再評価する事を目的とする。

(2) 本研究と論文の位置づけ

近代化産業遺産としての再評価には、遺産自体の歴史的な価値の評価に加え、地域住民の郷土に対する誇り・愛着を後世に伝えたいという想いをつなぎ留める役割と意義がある。郷土の歴史や文化を代弁する貴重な産業遺産の正統性を評価する事は、今後の景観整備のプロセスに活かす事が可能であり、本研究は近代化産業遺産の「再評価」および「価値の創出」のプロセスを通じて「空間+歴史+活動の連携」の手法を構築する事を目指している。

ランドスケープの分野に求められる手法は、空間の質のコントロールに留まらず、その土地の歴史的価値の評価から運用方法のマネジメント、価値の共有のための活動、それらの取組みが複合的に組み合わせられて運用されていくことで、ランドスケープデザインとしての価値が醸成されていく。またそのプロセスそのもの

に価値が発生するのである。その複層性、変化と循環のプロセスを内包し、産業遺産を核とした地域デザインに活かしていくため、本稿では岩瀬牧場におけるその開設期から現在に至る歴史的経過を整理し、その特徴を明らかにした上で、近代化産業遺産の価値を活かした将来の景観整備計画の前提条件を整理する。

2. 近代化産業遺産の呼称について

遺産の管轄省庁、学術団体等によって対象の遺産を「近代化遺産」「産業遺産」「産業記念物」「ランドスケープ遺産」等と呼んでおり、統一された名称はない。市原ら¹⁾の研究によれば、近代化遺産と産業遺産は、年代範囲は異なるものの、対象分野は同一であるとされている。ランドスケープ遺産については、近代造園史上の観点から、幕末期の伝統的な諸庭園の荒廃が近代造園の検討の基盤になったことや特に近代ランドスケープ遺産の検討において極めて重要な対象となる公園について制度上の到達点の画期を示した都市公園法の制定（昭和32年：1957）などの時期を踏まえると、広く1850年代から1950年代までを対象とすることもなお有効と考えられ、個々の空間のみならず、生活、生業としての景観および、自然景観が含まれるため、複合的、重層的価値として、その多様性を評価することが求められる²⁾とある。また、オーセンティシティ概念の5つのキーワード³⁾のうち、「文脈、環境、精神」および「技術、伝統、プロセス」も、空間の持つ有形の価値だけでなく、無形の価値も包含した複合的、重層的価値を評価するための項目として重要であるといえる。

以上の点から本研究では、「(1) 西欧技術の導入による産業化が進行し、近代化へとつながっていった1850年から1950年代に成立」し、「(2) 単独の産業、交通、土木関連の建造物のみならず、それら施設を包含する景観資源」である事。加えて「(3) 有形の価値だけでなく無形の価値を包含した複合的、重層的価値を有する」産業遺産を、近代化を通じランドスケープ的価値を認識された遺産として「近代化産業遺産」と呼ぶ。

*筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻 **筑波大学芸術系 ***東京理科大学工学部建築学科

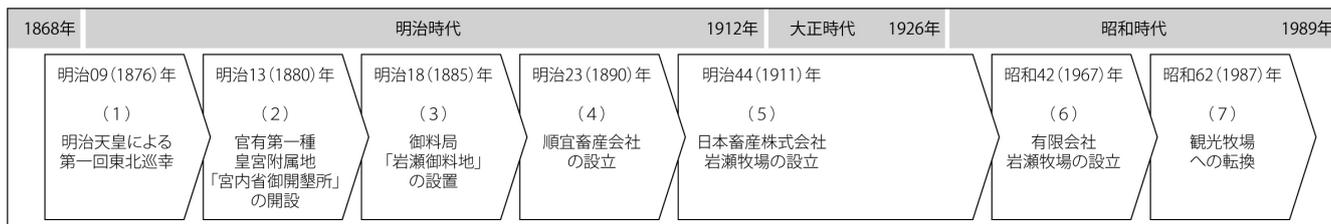


図-1 岩瀬牧場の時期区分

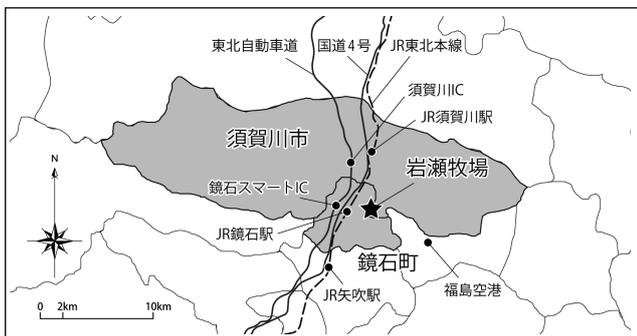


図-2 岩瀬牧場位置図

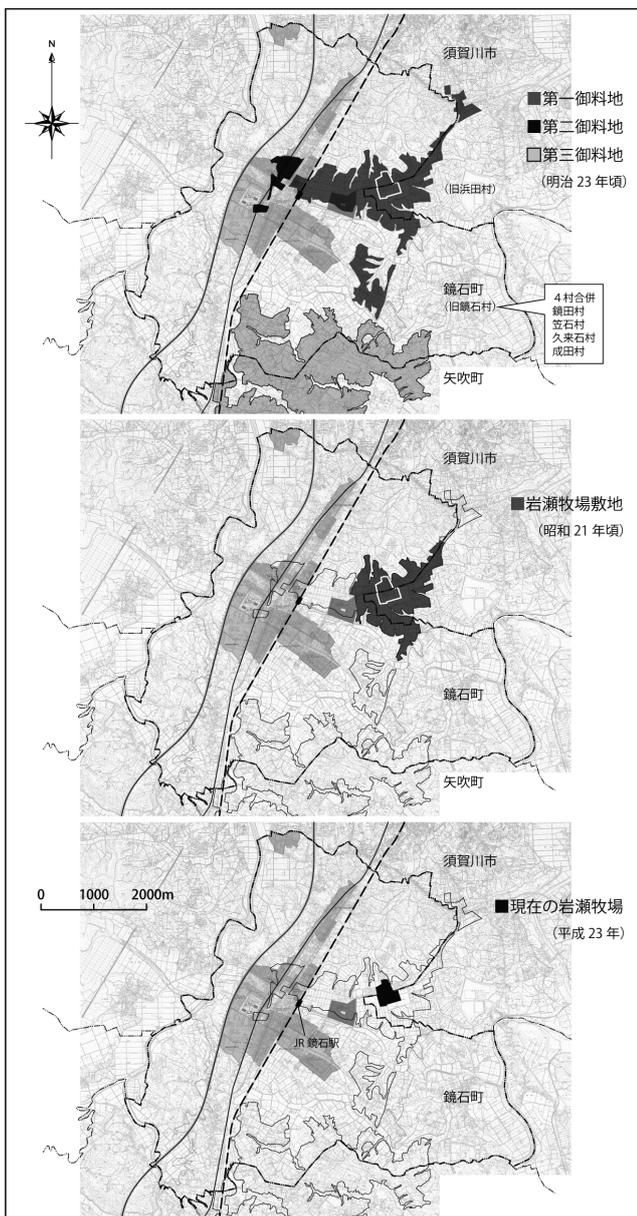


図-3 牧場敷地変遷図

3. 岩瀬牧場の概要

本章では岩瀬牧場の成り立ちを7つの時期に区分し、歴史的経緯を整理した(図-1)。岩瀬牧場は、福島県鏡石町、須賀川市両自治体にまたがっており、国道4号線および東北自動車道、須賀川ICおよび鏡石スマートIC、JR鏡石駅、福島空港といった主要交通拠点と近接している(図-2)。明治13(1880)年に開設された、日本で初めての官営西欧式牧場という歴史的背景を有する。民間企業に払い下げられた後も現在まで経営が続く約30haに及ぶ広大な「生きた近代化産業遺産」といえる(図-3)。

(1) 明治天皇による第一回東北巡幸の実施(開設前)

明治9(1876)年、明治天皇は第一回東北巡幸で笠石村小貫集太宅に小休止した際、鏡石・矢吹・須賀川に広がる原野約2,700haの開墾を指示した事が開拓の発端と伝えられている⁴⁾。

第一回東北巡幸を含む、明治5(1872)年～明治18(1885)年の6回にわたる明治天皇の長期地方巡幸において、東北巡幸は大局的には大久保利通の国家構想を背景に、その基盤整備の実践的課題にさきわめて有効な戦略として実現した。開発の遅れた東北地方における産業奨励にはずみをつけ、殖産興業の全国的展開を可能にし地方資産を活用する道を開くこと。そして地方行政を掌握し地方有力者との連携を強め、政府の支持基盤の強化である⁵⁾。

(2) 官有第一種皇宮附属地「宮内省御開墾所」の開設

東北巡幸での開拓の指示を受けた伊藤博文内閣が欧州式大農法経営を視察し、明治13(1880)年に官有第一種皇宮附属地として、鏡石村・浜田村に広がる六軒原と呼ばれた草原地帯、約650haを指定し⁶⁾、宮内省御料局直営の宮内省御開墾所として開設された。これが鏡石・矢吹にまたがる矢吹が原開発の礎となり、明治政府の士族授産事業の延長線上に位置づけられた、日本初の西欧式牧畜・畑作農法の導入であった。明治13(1880)年、宮内省御用掛勝野源八郎が六軒原に赴任し、翌年明治14(1881)年から約300haの原野開拓に入る。開墾すべき土地のうち、荒起が80ha、耕耘が11ha、使役した労働力は延べ3,800名、牛1,200頭、馬341頭、所要経費は2,068円12銭であった⁴⁾。同年には、東北旅行中の郵便報知記者原敬が六軒原を訪れている⁶⁾。

(3) 御料局「岩瀬御料地」の設置

明治18(1885)年12月に御料局が設置され、岩瀬第一、第二、第三御料地が設定される。明治20(1887)年、御開墾所が宮内省御料局岩瀬出張所となる。当時の岩瀬御料地は、御開墾所の他、西白河郡から岩瀬石川、田村に跨がる広漠たる原野約1,800haを御料地に編入し、宮内省岩瀬出張所が鏡石村一貫池傍の御開墾所(現在の鳥見公園)に設けられた⁷⁾。

(4) 順宜畜産会社の設立

明治23年(1890)6月に、当時の外務次官岡部長職子爵から品川御料局長に旧御開墾所の悉皆拝借の申請書を提出され、同年7月岡部子爵に拝借許可が降り、鏡石村六軒原、藤沼原の650haと設備、家畜一切が貸下げとなった⁷⁾。また、同時期に関係各村民から品川御料局長宛てに岡部子爵拝借分の半分は貸与申請が提出されており、その後、住民宛に「願いの趣、聞き届く」の回答が有り関係住民の申請が通っている。

明治24(1891)年には岩瀬御猟場が設けられている。(その後、

大正14年に廃止)。明治40(1907)年、岡部子爵が牧場経営を株式会社に切り替え、順宜畜産株式会社となる。同年9月30日、創立総会の決議で専務取締役永田恒三郎が種牛購入のため渡欧を命じられ、同年10月横浜港を出発した。永田はオランダに滞在し、血統書付きホルスタイン種牛の牡3頭、牝10頭の計13頭を購入して帰国の途についた⁴⁾。ホルスタイン乳牛と共に農機具が輸入され、その際、日本とオランダ両国の友好の印として記念の「鐘」が贈られている。明治43(1910)年当時、朝日新聞記者として活躍していた杉村楚人冠が永田恒三郎の招待で岩瀬牧場を訪れ、その情景をもとに「牧場の朝」を書いたとされている⁶⁾。

(5) 日本畜産株式会社岩瀬牧場の設立

岡部長職子爵の子孫、岡部長景(文部大臣)の代に第一銀行の渋沢栄一その他、華族・財界人などへの縁故募集により、明治44年(1911)10月、順宜畜産株式会社から日本畜産株式会社となり、順宜牧場から岩瀬牧場と名称を改める。

岩瀬牧場とはほぼ同時期の明治24(1891)年に創設されている岩手県雫石町小岩井農場では、岩崎久彌経営期の昭和13(1938)年に小岩井農場株式会社として独立経営に切り替わっている⁸⁾。

宮内省の認可を受け、土地・設備・養畜を含む一切を新会社が引き継ぎ、牛乳の生産・販売を主として経営が進められた。日本畜産株式会社が継承した土地財産は次の通りである(表-1)。

明治44(1911)年には関係町村長連名による請願の結果、敷地及び駅舎建設の資金を全額提供し、鏡石駅が開駅する。大正2(1913)年、岩瀬牧場と鏡石駅東口を結ぶ牛乳輸送用のトロッコを走らせる軽便軌道が敷設され汽車を利用できるようになった⁴⁾。

大正12(1923)年、オランダより大型農機具等が輸入され、イギリスからは日本で初めてのフォードソンF型トラクターが、日本郵船株式会社により15~16台直輸入され、その内1台が牧場に納入された⁶⁾。大正13(1924)年頃、東郷平八郎、加藤高明、後藤新平、斎藤実、伊藤巳代治ら政府高官等が相次いで訪れている。

昭和4(1929)年、大正時代以来の経済不況により岡部子爵が経営から手を引く。岡部子爵が放出した株を福森利房が買い取り、会社経営に当たっていたが、昭和8(1933)年、日本経済タイムス社長遠藤三郎が日本畜産株式会社社長に就任し、牧場経営を甥の遠藤一郎を牧場長として昭和43(1968)年まで当たらせている。

昭和14(1939)年頃、旧事務所棟として現存している事務所棟

表-1 日本畜産株式会社継承財産一覧⁶⁾

森林	
1) 杉、檜植林	約20ha
2) 畑地	約200ha
3) 松林	約200ha
4) 牧草地	約200ha
建物	
1) 事務室及居宅	7棟
2) 農具、牧舎、浴場共	21棟
3) サイロ、乾燥小屋、貯蔵室、肥料小屋、薬局、機械庫、鍛冶大工小屋、収穫舎、練乳製造所、牛、馬、豚舎等	合計56棟、総建坪1,900坪
耕牧用機械機具その他	
1) 英国製煉乳製造機械	1台
2) 米国製モーアレーキ、同ホーク	1台
3) 英国製バター製造機	1台
4) 耕作用機械器具	1式
5) 米国製脱穀機	1台
6) 耕馬	30頭
7) 米国製粉砕機	1台
8) ホルスタイン牝牝牛	193頭

が新築されている。太平洋戦争時、牧場は食料増産の場として営まれ、馬鈴薯・麦・玉蜀黍等が主に作られた⁶⁾。玉蜀黍貯蔵庫が大戦末期頃に現在地へ移築され、韓国人労務者の飯場として使用されていた時期もある。元は道路を隔てた北側敷地に2棟平行に東西棟で建てられていたものである⁹⁾。昭和20(1945)年、西武鉄道の堤康次郎が日本畜産株式会社の筆頭株主となり福島県と交渉し県所有地を取得、昭和23(1948)年には農地解放により、日本畜産株式会社所有地72haを提供している。そして昭和26(1951)年、日本畜産株式会社が堤康次郎の経営する西武鉄道の傘下(西武農場部)に吸収され、日本畜産株式会社は解散する。

(6) 有限会社岩瀬牧場の設立

昭和30(1955)年、福島県知事大竹作摩は西武鉄道堤康次郎の所有地を買収し、昭和42(1967)年に福島県立岩瀬農業高校の移転用地として20haを提供している。同年、福島交通社長小針曆二に売却し、小針曆二は新たに有限会社岩瀬牧場を設立する。

昭和48(1973)年、須賀川市立博物館から「牧場の暁」と題する紀行文を掲載した中学国文教科書が発見された。この教科書(作者不詳)に「岩代国岩瀬牧場」とあり、また「楚人冠全集」の中の「ひとみの旅」の文章中に「牧場の朝」の記述があり、何れも杉村楚人冠の文章と一致した。昭和57(1982)年、『牧場の朝』の作詞者は杉村楚人冠と断定された他、岩瀬牧場がそのモデルであることも断定され、翌年岩瀬牧場に隣接する「鳥見山公園」の一角に唱歌『牧場の朝』の歌碑が建立された。

(7) 観光牧場への転換

有限会社岩瀬牧場経営のもと、昭和62(1987)年から翌年にかけて、牧場内にふれあい広場、新牛舎、バーベキューハウス、バラ園、レストラン、売店、ミルクプラント、熱帯すいれんハウス、水耕栽培ハウス、フラミンゴ園、カンムリヅル園、ラジオ福島サテライトスタジオ、花菖蒲園等が新設され、観光牧場としてオープンした。また、平成元(1989)年には、ヨーロッパ風沈床庭園が整備され、旧牛舎の改修が行われている⁶⁾。その後、平成12(2000)年に岩瀬牧場史跡保存研究室を母体とした「牧場の朝・オランダ交流会」が発足・活動を開始している。同年、オランダから贈られた友好の「鐘」が鏡石町文化財に指定される⁷⁾。

4. 岩瀬牧場に現存する歴史的価値を有する資源群

牧場内に現存する旧五号牛舎東西棟、コンクリートサイロ、穀物板倉および旧事務所は、玉蜀黍貯蔵庫を含め一連の近代化産業遺産と呼べるものであり(図-4)、現在、玉蜀黍貯蔵庫のみ須賀川市指定文化財に登録されている⁹⁾が、その他の施設群も同等の歴史的価値があると思われる。ソメイヨシノやプラタナス等の巨木群と広大な敷地が織り成す建築物を包含するランドスケープは明治期からの牧場景観を今に伝えている。資料館(旧事務所棟)内金庫に保管されている開設当時から文献史料や最初期のトラクター、農機具、乳製品加工機具、トロッコ軌道、オランダからホルスタイン牛を輸入した際に寄贈された牧場の鐘等も牧場の背景にある日本の牧畜産業の歩みを証言する貴重な資源といえる。

(1) 建築物

1) 玉蜀黍貯蔵庫2棟(写真-1)

現存する建築物の中で唯一重要文化財(須賀川市指定:昭和44年10月1日)に登録されており、福島県近代化遺産報告書によれば、「明治13(1880)年建設のかやぶき木造平屋寄棟造りで高床式格子壁を有し、通風・乾燥を意識した中国ウイグル自治区吐魯蕃の葡萄貯蔵庫と共通するものがあり、明治初期の外来農業の影響を受けた建造物として重要」とある⁹⁾。

2) 旧五号牛舎 東棟(写真-2,3)

大正7年(1918)頃に建設されたと思われるキングポスト・トラスを用いた木造平屋寄棟造りで、乳製品の製造電屋であったと

推測される。当時、鏡石駅までトロッコ軌道が設けられていたが、一部分を残し昭和14(1939)年に廃止されている⁹⁾。

3) 旧五号牛舎 西棟 (写真-2,4)

東棟と同時期に建設されたと思われる。南に角を伸ばした木造平屋切妻造りT型平面の牛舎で、現在も殆ど改造されておらず比較的保存状態は良い⁹⁾。

4) コンクリートサイロ (写真-5)

旧五号牛舎西棟横にあるコンクリート製のサイロで、コンクリート製のサイロとしては日本最古のものと思われる。資料館内の史料には「明治30(1897)年にオランダよりコンクリートを輸入⁷⁾と記述されているが、福島県近代化遺産報告書内では「建設年代は旧牛舎と同様、大正7(1918)年頃と推定され、旧牛舎およびサイロ2棟と併せて一括りのものと考えらるべきである⁹⁾。」

との記載があり、正確な建設年代については現時点で不明である。

5) 旧事務所棟 (写真-6)

旧事務所棟は、昭和8(1933)年に日本畜産株式会社社長に就任した遠藤三郎の設計によるものであるが、当初、場長宅が併設されていたという⁹⁾。

6) 穀物倉 (写真-7)

旧牛舎と道を隔てて北側にある大型の穀物板倉で、建設年代は昭和初期頃と推測されており、貴重な景観要素となっている⁹⁾。

(2) 文献史料

牧場開設期から現在に至るまでの地域史や産業史を知る上で手がかりとなる史料が多く残されている。観光牧場へと転換を図る際、相当数の史料を整理したとの事¹⁰⁾で、現存する史料以外にも多くの史料が昭和63(1988)年頃まで残っていたと思われる。

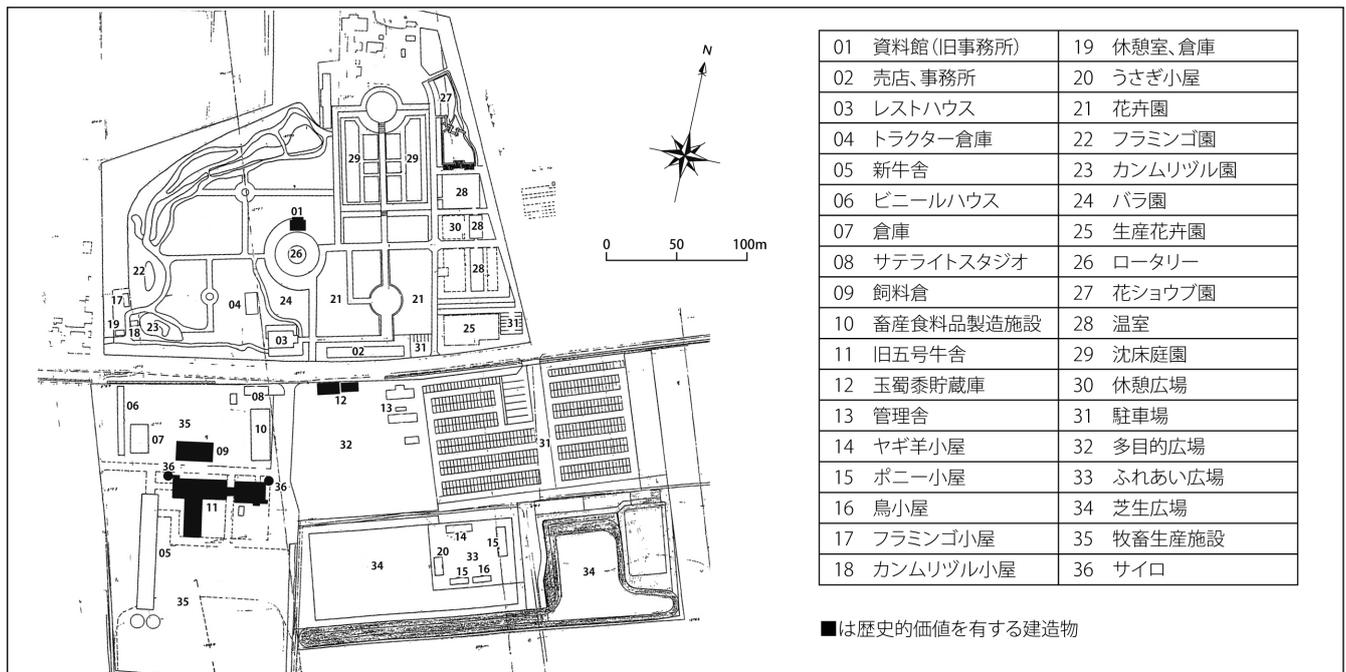


図-4 施設配置図 (有限会社イワセファーム所有の施設配置図に筆者が追記)



写真-1 玉蜀黍貯蔵庫



写真-2 旧五号牛舎(東西棟)外観



写真-3 旧五号牛舎東棟



写真-4 旧五号牛舎西棟



写真-5 コンクリートサイロ



写真-6 旧事務所



写真-7 穀物倉

資料館内金庫に所蔵されていた文献史料を「図面関係」「権利・契約関係」「歴史関係」「業務関係」の4項目に分類し、一覧表として整理した(表-2)。

(3) 樹木群

牧場植栽の主目的は防風(防風林)、日除け(日除け樹)といった自然条件の緩和のための機能獲得および、放牧地の囲い込みにみられる境界域の設定であり、それが経年変化に伴い広大な敷地における、列植によるビスタの形成や日除け樹のランドマーク化といった景観価値を持つに至る。それが牧場景観の特徴といえる。

岩瀬牧場においても、ヤマザクラやソメイヨシノ(写真-8)、ポプラの列植(写真-9)、プラタナス(写真-10)やイチョウ(写真-11)等が防風林や境界木、日除け樹として植栽され巨木化しており、幾多の構造物が撤去され、場内の主要動線位置が変わってしまった現在、牧場景観としての骨格を窺い知る重要な手がかりとなっている。牧場内および敷地周辺に植栽されている樹木について、樹種判別および植栽位置調査を行った結果、主要な樹木は約300本近くあり、ソメイヨシノが一番多く植栽されている事がわかった(図-5)。

(4) その他の資源(牧場の鐘など)

鏡石町の文化財である「牧場の鐘」(写真-12)は、現在は資料館に展示されているがオランダとの国際交流の原点であり、かつて牧場内に時を告げていたその音色が牧場景観の一旦を担っていたと思われる。トロッコ軌道(写真-13)は乳製品の運搬以外に来訪者の移動手段としても活用されており、鏡石駅開設と合わせ、牧場が果たした地域への交通網提供の名残といえる。乳製品加工器具類や農機具類(写真-14,15)も輸入された最初期のトラクター(写真-16)と合わせ、生産技術の機械化の変遷を辿る

表-2 資料館所蔵文献史料一覧

No	名称	制作者	日付
1	岩瀬牧場所在建物平面図	日本畜産株式会社	大正13(1924)年
2	御料地地図	岩瀬牧場	昭和4(1929)年
3	不動産土地建物森林台帳	日本畜産株式会社	昭和21(1946)年
4	牛舎断面図	藤田組	昭和45(1970)年
5	外構計画図	大高建築事務所	昭和55(1980)年
6	南側計画図	大高建築事務所	昭和55(1980)年
7	外構計画図	大高建築事務所	昭和55(1980)年
8	第1第2御料地略図	日本畜産株式会社	不明
9	大正7年~大正12年頃の岩瀬牧場見取図	竹内央	不明
10	日畜譲渡地図	不明	不明
11	第1御料局地図	不明	不明
12	第3御料局地図	不明	不明
13	岩瀬第3御料地岡部借地	不明	不明
14	停車場新設請願書	岩瀬郡各村長	明治38(1905)年
15	蘭牛血統登録書	不明	明治40(1907)年
16	鉄道院往復書類、牛乳販売、電話設置許可	日本畜産株式会社	明治44(1911)年
17	日畜更生の段階及び経路	遠藤三郎	昭和3(1928)年
18	駅前債権問題書類	不明	昭和4(1929)年
19	従業員就業規則、各種契約書	日本畜産株式会社	昭和4(1929)年
20	矢吹原県有地に関する件	不明	昭和16(1941)年
21	株主名簿	日本畜産株式会社	昭和17(1942)年
22	福島県指合農地に関する件	不明	昭和22(1947)年
23	定款	日本畜産株式会社	昭和24(1949)年
24	職務規定	日本畜産株式会社	昭和27(1952)年
25	茅の火入れ許可申請	不明	昭和29(1954)年
26	国有財産売買契約書	不明	昭和62(1987)年
27	種牛血統書	順宣牧畜株式会社	不明
28	土地借地証書	日本畜産株式会社	不明
29	岩瀬牧場引継書類 目録(複写)	日本畜産株式会社	不明
30	原野監督委託耕作 請書	岩瀬牧場	不明
31	御料地私下願	不明	不明
32	約定証	不明	不明
33	森林立木監守証	不明	不明
34	鏡石村郷土誌	鏡石村	大正元(1912)年
35	日本畜産会社の概況	日本畜産株式会社	昭和11(1936)年
36	帝室林野局五十年史	帝室林野局	昭和14(1939)年
37	岩瀬牧場の沿革及び年表	前牧場長大泉清	昭和63(1988)年
38	牧場年表及び唱歌『牧場の鐘』とオランダとの交流の歴史	牧場の鐘・オランダ交流会	平成16(2004)年頃
39	森林施業要領	岩瀬牧場	大正5(1916)年
40	森林鑑定調査書	日本畜産株式会社	昭和16(1941)年
41	森林鑑定調査書	日本畜産株式会社	昭和17(1942)年
42	天候・入場者数・売上 日別データ	岩瀬牧場	昭和62(1987)年



図-5 主要樹木位置図および樹種別本数一覧



写真-8
ソメイヨシノの列植
(大正13年頃植栽)

写真-9
ポプラ並木
(植栽時期不明)

写真-10
旧五号牛舎横のプラタナス
(明治40年頃植栽)

写真-11
旧事務所前のイチョウ
(植栽時期不明)



写真-12
牧場の鐘
(明治40年輸入)



写真-13
トロッコおよびトロッコ軌道
(大正2年頃敷設)



写真-14
露面牛乳冷却機
(明治38年頃輸入)



写真-15
玉蜀黍・大豆引割機
(明治40年頃輸入)



写真-16
フォードソトラクター
(大正12年輸入)

上で貴重な産業遺産であり、牧畜という産業史を物語る有益な資源である。それら資源が同一空間に存在する事で、生産技術および地域文化の近代化の過程を複合的に評価する事が出来る。

5. まとめ

福島県岩瀬牧場の開設期から現在に至る過程を7つの時期に区分し、その事実経過を述べた。また牧場内の近代化産業遺産としての資源を4つに分類し、整理した。

日本最初期の西欧式官営牧場である宮内省御開墾所として創設され、欧米式酪農経営を推進した。ホルスタイン乳牛をオランダより輸入した際に贈られた記念の「鐘」および牧場景観が、文部省唱歌『牧場の朝』のモデルとなり、明治期からの景観を現在に伝えている。

牧場内に現存する建造物や農機具類等は生産技術の進歩、背景にある社会構造の変遷を物語る存在である。それに対して樹木群は、生産技術が景観の骨格を生成する要因たりえる事を示している。植栽配置、樹種の選定等は牧畜産業の技術に起因するものであり、生産技術の視覚化、文化的営為の現象である。それに対し樹木の成長、経年変化は自然の営みの現象である。この2点が変わり景を為し、牧場の骨格を現在に伝えている。岩瀬牧場の空間的価値は当時の構造物が現存している状況によるものではなく、生産技術の経年変化に伴うランドスケープ化にあるといえる。加えて明治期における牧畜産業の技術、風景概念を海外から直接持ち込み導入した「西洋化」の事例として歴史的価値を有している。

以上の点から本稿の結論として、岩瀬牧場は空間的価値および歴史的価値を併せた複合的価値を有する近代化産業遺産であるといえる。

130年余の時間を経る中で、牧場景観としてランドスケープ的価値を獲得し、開設当時の計画原理が日本における牧場景観の原点といえる。空間自体は不変ではないが、「牧場」としての正統性、生業としての技術の持続は可能である。背景にある社会構造の変化、地域産業の変化、人々の認識の変化等、相対的变化に伴う価値の変容と、本質的価値の持続の両立が、重層的価値を育む上では重要である。近代化産業遺産をはじめとした歴史的な建造物や町並み、景観などは、それ自身が独自の価値を持つだけでなく、住民の郷土への誇りや愛着を深め、住民共通のよりどころとなり、地域社会の連帯感を強めることにも資することから、地域づくりを進める上で重要な役割を有する。

岩瀬牧場は2011.03.11の東日本大震災により被災したが、玉蜀黍貯蔵庫等をはじめとした歴史的建造物群は、損傷はあるものの倒壊は免れ、逆に昭和期以降に建てられた現代施設は大きく損壊している。この「残るべきして残ったもの」、「壊れるべきして壊れたもの」といえる事象が、地域における正統的な環境資源とは一体何かという問いかけに対する答えを示唆している。牧場のも

つ歴史的意義、景観価値等を地域の有益な「資源」として捉え、震災復興を包含する将来の景観整備モデルの1つとしてとりあげる価値と意義がある。

現在の岩瀬牧場は企業が運営しているが私企業の取組みには限界があり、大学・学術団体が有する専門知識やアイデア、郷土に愛着をもつ地域住民との協力、ナショナルトラストに代表される文化財保護団体等との連携、行政のサポート等、各主体がそれぞれの知恵や力を持ち寄り、総体として取組むことが活動の実現において重要である。これは一企業、大学、地方自治体、住民それぞれ単独の努力では得られないものであり、本研究は各主体の活動において前提条件となる学術的研究として位置づけられ、そこから得られた明治の景観、建築の術をいかに平成の世の景観整備に活かしていくか、今後の課題としてその手法が問われている。

謝辞：本稿執筆にあたり、ご協力頂きました(有)イワセファームの伊藤藤氏、橋本政宏氏、前岩瀬牧場長の大泉清氏に、厚く御礼申し上げます。

補注及び引用文献

- 1) 市原猛志、趙世晨(2008)：九州地方の近代産業遺産の現存状況及びその特徴に関する研究：日本建築学会計画系論文集第73巻第634号、2697-2702
- 2) 日本造園学会ランドスケープ遺産研究委員会報告(2007)：近代ランドスケープ遺産の保全に関する提言：ランドスケープ研究70(4)、283
- 3) 西村幸夫(2000)：都市論ノート 景観・まちづくり・都市デザイン：鹿島出版会、152pp
- 4) 永山祐三監修(2000)：図説 須賀川・石川・岩瀬の歴史：株式会社郷土出版社、194-195pp、207pp
- 5) 鈴木しづ子(2002)：明治天皇行幸と地方政治：株式会社日本経済評論社、12-13pp
- 6) 前岩瀬牧場長大泉清らによる記述(1988頃)：岩瀬牧場の沿革および年表：岩瀬牧場資料館所蔵資料
- 7) 牧場の朝・オランダ交流会(2004頃)：岩瀬牧場年表および唱歌『牧場の朝』とオランダとの交流の歴史：岩瀬牧場資料館所蔵資料
- 8) 岩手県教育委員会(1997)：岩手県の近代化遺産-岩手県近代化遺産(建造物等)総合調査報告-：岩手県教育委員会、52pp
- 9) 福島県教育委員会(2010)：福島県の近代化遺産-福島県近代化遺産(建造物)総合調査報告書一：福島県教育委員会、122-125pp
福島県教育委員会の調査では岩瀬牧場に関連する建築物として、(1)玉蜀黍貯蔵庫、(2,3)旧五号牛舎東西棟、(4)穀物板倉、(5)旧事務所の計5点が調査対象となっており、主として(1)建設年代(2)構造(3)分類(4)設計・施工者(5)指定等の有無について調査が行われ、当時の牧畜産業を窺い知る一連の産業遺産として評価している。
- 10) 前岩瀬牧場長大泉清氏へのヒアリング(2011年7月18日実施)による